

「原点」から湧き出る力

倫理研究所 理事長 丸山敏秋

行く春や鳥啼(な)き魚の目は涙 『おくのほそ道』

松尾芭蕉が門弟の河合曾良(かわいそら)を伴って旅に出たのは、元禄二(一六八九)年三月二十七日(新暦の五月十六日)でした。多くの人から見送られた心境を、鳥や魚までが別れを惜しんでいる、と感じて詠んだのです。この名句を味わいながら、過ぎゆく春と共に、病原性ウイルスも早く消え去ってほしいものだと思います。これまでの新型コロナウイルス感染の経緯でもとも不思議なのは、日本では欧米よりも早く感染者が出たのに、急拡大には至らなかったことです。いくつもの好条件が作用したのでしょうか。しかし徐々に感染者や死者の数は増え、万が一にも「爆発」しないようにと、政府の緊急事態宣言が出ました。未知のウイルスであるがゆえに、この先どう変異するかもわかりません。楽観は禁物です。

筆者(丸山)は少し考えるところがあつて、長くマスクを着用しませんでした。マスクでは超ミクロのウイルスは防げないとWHO(世界保健機関)は公言していたし、厚生労働省は「咳やくしゃみの出る人はマスクを」と指導していました。他方、市場でマスクは品薄となり、必要な人が入手できない状況にもなりました。だから体調も悪くない自分は着用しない、と決めたのです。東京では電車の中を見回すと、九割以上の人がマスク姿。着けないで乗るのは、ちよつと勇気がいりました。

しかしやがて、無症状でも感染している場合があるのでマスクを着けよ、とかなり強く言われるようになり、WHOもマスクには一定の効果があると前言を撤回。品薄ではあるものの、量産体制がとれたというので、ようやく自分も屋外ではマスクを着けることにしました。そ

れでわかったのは、今やマスクは感染防止の域を超えて、病原性ウイルスに立ち向かう国民の、団結のシンボルの役割も果たしているということです。

電車の中や道ゆく人々の大半がマスクを着けたり、外出自粛の要請が自治体から出ると町中から人影が激減するのは、日本人のガバナビリテイ(governability)をよく示しています。耳慣れないガバナビリテイという英語は「統治能力」と訳されていたのですが、それは「真つ赤な誤訳だ」と主張したのが、上智大学名誉教授の渡部昇一氏でした。

それは「被統治能力」と訳すべきだ、と渡部氏は言いました。「従順」という言葉に似て、上から言われたことにはスナオに従うことができる一種の能力がガバナビリテイです。国家でも企業でも家庭でも、国民や構成員にその能力が乏しければ、いくらリーダーの能力が高くても集団は機能しません。

ガバナビリテイに富んでいた日本人は、いろいろな場面で一一致団の力を発揮してきました。しかしまた度が過ぎると、おとなしい羊の集団のようになってしまいました。あるいは愚かなリーダーがガバナビリテイを悪用すると、全体がとんでもない方向に進むことになり、目下の非常時でも、注意すべき点の一つでしょう。

*

さて前号では、この非常時だからこそ、「苦難福門」を改めて自分のバックボーンにしようと言えました。今回のキーワードは「原点」です。

筆者の場合、出張予定が次々に延期や中止となり、仕事のスケジュールが、すっかり変わってしまいました。

(次ページにつづく)



デスクワークの時間が増えたため、今まで以上に研究や執筆に専念できるようになりました。今年の九月は倫理運動の創始から七十五年目になります。その「原点」と言える頃の資料に改めて目を通すと、いろいろな発見がありました。

創始者の丸山敏雄は、人生の真理を求めて、学校の教師から学問の道へ、また学問から宗教修行へと変転を重ねた人です。戦前の一時期は、ある神道系の宗教教団のリーダーの一人としても活躍しました。ところが政府の弾圧を受けて投獄され、ひどい拷問を受けたり、独房に閉じ込められたりします。

一年あまり後に仮出所すると、足かけ八年もの長い裁判に臨みました。しかし結果は一審二審とも有罪。その間に、丸山敏雄の長年の経験と知識といくつもの「悟り」が熟成されて、万人幸福の生活法則が見出されていきます。宗教に関しては、その排他性を痛感したことから、自身の信仰心は高めながらも、一宗一派にとらわれない姿勢を堅持しました。

そして迎えた敗戦。丸山敏雄は研究に没頭しながらも、混乱し疲弊した世相を見るに堪えかねて、日本の再建のために立ち上がります。当時の悲惨な国の様子を記憶している人はもう少ないでしょうが、自分や家族が食べ、るだけでやつのときに、資金もまったくないなかで世直しの事業を始めるなど、狂気の沙汰かもしれませぬ。しかし創始者は、信頼できる「人」という財産だけは持っていました。

倫理研究所の前身である「新世会」が発足したのは昭和二十二（一九四七）年の秋です。団体を設立して活動しなければ、「倫理」を広く人々に伝えられません。丸山

敏雄は満腔の思いを込めて会の設立趣意書を書き、知友に配って協力を求めました。その趣意書の全文を、「付録資料」として次頁に載せておきます。

世の中にはいろいろな組織、いわゆる法人があります。一般の会社・企業は営利法人ですが、利益の獲得と分配を目的としない法人は非営利法人で、大きくは「社団」と「財団」の別があります。創始者は「社団法人」を選びました。「社」とは人のことですから、多くの人に呼びかけて賛同者となってもらい、会員制度をとることで、その会費を財源とした公益の教育事業を展開しよう——そう決意したのでした。

そのような倫理運動の「原点」については、今までに幾度も話したり書いたりしてきました。設立趣意書も何度となく読みました。しかし、現今のような非常時に、当時のことを改めて確認すると、胸に響くものが違います。

とくに趣意書の「至らぬながら、自分一人で間違いの責を背負って立つという強い決心で進みましょう」の一節には、震える思いがしました。その決心は、倫理法人会の会友の方々にとつての「原点」でもあります。

申すまでもなく、皆様の会社においても「原点」があるに違いありません。創業の精神、経営理念、経営哲学……。そんな窮屈な言葉でなくとも、創業時の（あるいは創業者の）熱き思いや当時の苦労は、自社の「原点」にほかなりません。もちろん、自分自身の「原点」は、生命の元である両親です（『万人幸福の葉』第十三条）。

この非常時に、じっくりと「原点」に立ち帰り、新たな気づきや感動を腑に落としてください。そこからきつと、思いもかけない前進の力が湧き出るでしょう。

（次回につづく）

〔付録資料〕

〔新世会趣意書〕

我国は今、大切な時に当っております。というのは、道義は乱れ、宗
教心は薄らぎ、目を覆わしめることも少なくありません。

今にしてこれを改めなければ、悔いを後に残すでしょう。

日本の再建は、単なる理論や掛声だけで出来るものではありません。
目の前の一步一步を明るく正しく、喜んで、しっかりとふみしめて行く、
これ以外に道はありません。

我国は、古いだけに間違いも積み重なり、悪い習慣も多く、知識の上
からも、道義の点からも、世界の国々に、遅れていることが、はつきり
と分ってきました。これもまた、今改めなければ、再びその時機は参り
ますまい。

これを見、これと思うと、たまらない気になります。至らぬながら、
自分一人で間違いの責を背負って立つという強い決心で進みましょう。
このままに捨てておいたら、日本が地上に存在する意義も無くなるで
しょう。

自ら助けるものでなければ、天は助けません。

本会は、こうした止むに止まれぬ念願から発足致しました。

ここに機関雑誌『文化と家庭』は、正しい生活の源となり、朗らかな
家庭のうるおいともならしめたいと誓っております。

世の前途を憂え、世界平和を願う諸兄諸姉、こぞって参加愛読せられ
ますよう、又実践の道づれとして、雄々しく発足せられますよう、願っ
て止みません。

昭和二十二年九月

東京都武蔵野市境九六〇

新世会

*『丸山敏雄全集』第二十四巻下に掲載されています。